

## 抜隊仮名法語

以前、『沢水法語』を現代語訳して以来、名僧・沢水禪師が『抜隊仮名法語』によって如説修行して大悟され、後年、本心を明らかにする工夫の仕方を説く抜隊法語こそは、「数多くの仏法信心中の極意であり、如来の四十九年の説法の要である。仏法のみならず、諸道の根本至要である」と力説されているのを知って、是非とも現代語訳して多くの人にお読み頂きたいと念願していた。訳中に太字にした箇所は、読者の便を図り、重要な語句を一見して分かるようにしたものである。今回訳したものは一部に過ぎない。引き続き訳していく予定である。なお、底本には、享保十二年（一七二七）版の復刻版を使用した。

\* \* \* \*

## 抜隊仮名法語

### 塩山仮名法語

輪廻の苦しみを免れようと思えば、直に成仏の道を知らねばならぬ。成仏の道とは、**自心を悟る**ということである。自心と  
いうのは、父母もいまだ生まれず、わが身もいまだこの世にない  
先から、現在に至るまで、移り変わることなく一切衆生の本性で

ある故に、これを本来の面目というのである。

この心はもとより清浄じやうじやうにして、この身が生まれる時も、生まれるという相はなく、この身は滅するとはいえ、死ぬという相もない。また、男女の相でもなく、善悪の色もない。喩たとえも及ばないがために、これを仏性ぶつじやうと言いうのである。しかも、(妄念わうねんをも含めて)すべての念がこの自性じじやうの中から生じることが、ちょうど大海から波が立つようなものである。それはまた、ちょうど鏡に影が映るのに似ている。

この故に、自心を悟ろうと思うならば、まず念の起こる源を見るべきである。ただ寝ても覚めても立ち居につけても、自心これ何ものぞと深く疑って悟りたいという望みの深いことを、修行とも工夫とも志とも道心とも名付けたのである。また、そのように自心を疑っているのを坐禅というのである。

一日に二千巻・万巻のお経や陀羅尼だらにを誦して、千年・万年怠らないよりも、一念(瞬時)でも自心を見るに越こしたことはない。そのような有相の(形のある)行は、ただ一旦いつたん福徳の因縁となるだけで、その福が尽きてしまえば、また三悪道(地獄・餓鬼・畜生)の苦を受ける。

(これに対して)一念の工夫は、たとい十悪五逆の罪を造った者も、一念翻ひるがえして悟ればそれで仏である。そうであるからとい

って、悟れるからということでは罪を造ってもよいということにはならない。自分で迷って悪道に落ちるのは、仏も祖師も助けることはできるものではない。

たとえば、幼い子供が父のそばで寝て、夢の中で人に殴りつけられたり、或いは病に侵されて苦しみを受ける時、「お父さん、お母さん、私を助けて」と呼んだところで、夢見る心の中へは行くことができないので、父母も助けることが不可能である如くである。たといその子に薬を与えようとしても、目覚めなければ受けることはできない。自ら目覚めることができれば、夢の中の苦しみから他人の助力を借りずに遁<sup>のが</sup>れることができる。

自心がすなわち仏であると悟るならば、たちまちのうちに輪廻を免れるということも、またその通りである。もし仏が助けるべきであるというのならば、一体いずれの衆生を一人とて地獄に落とすであろうか。この道理の真実であることは、自分で悟ってみなければ知ることができない。

そもそも只<sup>ただいま</sup>今、目に色を見、耳に音声を聞き、手を挙げ、足を動かす主<sup>ぬし</sup>は、これ何物ぞと見れば、これはみな自心のなす仕業<sup>しわざ</sup>であるとは誰しも知っているが、正直のところ、一体どういう道理であるかは分かってはいない。

これを無いと言おうとしても、用いるに随って自在であること

は明らかであり、有ると言おうとしても、その形は一向に目に見えない。ただ不思議なばかりで、とにもかくにも心得られるような形は無いままに、了見はそれ以上絶え果てて、如何ともするところができなくなる。これが**恰好かっこうの工夫**である。

このような時、精進心を失うような退屈の気持ちが生じることなく、ますます志が深くなり極まった時には、深い疑いの念が徹底して破れる時、自心の仏であることは疑いなくなり、生死の厭うべきも無く、法の求むべきも無い。虚空世界がただ我が一心である。

たとえば、夢の中で、外に迷い出て我が故郷に帰るべき道を失って、人に尋ねたり、神や仏に祈ったりしても、依然として帰ることができない者が、その夢が覚めれば、ただ我がもとの寢室の中にいる。この時、自分の夢の中の旅から帰郷することは、覚めるよりほかに別の道がないと知るようなものである。

これを、根本に還り、源に還るとも言い、安樂世界に生まれるとも言っているのである。これはいささか修行の力を得る筏いかだ（方便）である。坐禅をたしなみ、工夫をなす人は、在家も出家もみなこれ位の靈験はあるものである。これはもはや工夫をしない人が知ることのできないことである。だが、これがもう真の悟りであり、自分は法において疑いが無いと思うならば、大きな誤りである。ただ銅を見つけて（満足して）金を望むのを止めてしまう様なも

のである。もしそうした心の動きが生じたならば、勇猛心を奮い起たせて、次の様にいよいよ深く工夫をしなければならぬ。

我が身を見れば、幻の如く、水の泡や影の如くである（はかない）。自ら心を見れば、虚空の如くで、形も無い。この中に耳におんじょう音声を聞き、響きを知る主は、さてこれ何物ぞと、少しも妥協することなく深く疑うばかりにして、更に知れる道理が一つもなく成り果てて、我が身の有ることを忘れ果てる時、先程の見解は絶え果てて疑いが十分になると悟りも十分になることは、ちようと桶の底が抜けた時に、入っていた水が残らない如くであり、朽ち果てていた木にたちま忽ち花が開いた如くである。もしこの様であるならば、法において自在を得て、大解脱の人であるはずである。

たといその様な悟りが有ったからといっても、ただ幾たびも悟られる悟り（「悟った」という悟りの臭み、「所得底」とも言う）を打ち捨てて、悟る主に還り、根本に帰って、工夫を堅持するならば、意識情識の尽きるに随って、じしやう自性（自分の本性）が開け明らかになる有様は、ありさまちようと玉を磨くに随って光が増すが如くであり、遂には十方世界を照らすことになる。このことは疑いなきことである。

もし志が深くなければ、今生にその様に悟ることがなくても、工夫しながら臨終した人は、来世には必ずたやすく悟れることは、ちようと昨日企てたことは今日はたやすくはかどるが如くである。

工夫坐禅の時、念の起るのを厭ういとのも執着するのもしけない。  
ただその念の源の自心を見窮めねばならぬ。心に浮かんだり目に見えたりすることは、みな幻であり、真実ではないと知って、恐れるのも、貴たつとぶのも、執着するのもし、厭ういとのもしけない。

心が物に染まることなく虚空の如くであるならば、臨終の時も天魔（仏法を害する悪魔）につけ入られることはないはずである。また、工夫の時にはこの様なことやこの様な道理をいささかも心にかけることなく、「ただ自心これ何ぞ」とばかりにならねばならぬ。また、「ただ今一切の声を聞く主ぬしは何物ぞ」ということを悟れば、この心が諸仏・衆生の本源である。

観音は声について悟られたが故に、観世音と号するのである。「ただこの音声を聞いている者は何物か」と立ち居につけてもこれに心を集中し、坐ってもこれに心を集中する時、聞くものも知られず、工夫も更に絶え果ててにっちもさっちも行かずに切迫する様になる。

この最中にも音声が聞こえることは中断しないのであるから、ますます深くこれに心を集中する時には、切迫した状況も尽き果てて、快晴の空に一片の雲もないが如くの心境になる。この中には我といふべき物もなく、聞いている主も見当たらない。この心は十方の虚空と同様で、しかも虚空と名づくべきところもない。

このような境地になれば、これを悟りと思つものである。

この時また大いに疑わねばならぬ。「この状態の中で一体誰がこの音を聞いているのか」と、一念も起こすことなく参究して行けば、虚空の如くにして一物も無いと思えるところも絶え果てて、更に味わいも無くなり、暗夜の様な黒漫々になるところで、精進心を失うことなく、「この音声を聞いているものはこれ何物ぞ」と力を尽くして疑い十分になれば、疑いが大いに破れて、死に果てた人が蘇ったようになる様になるが、これが悟りである。

この時初めて、十方の諸仏・歴代の祖師に一拳にお目にかかることができるのである。もしその様になった時は、次の公案を挙揚よつしてみるが良い、「僧、趙州に問う、如何なるか是れ祖師西来意。答えて曰く、庭前の栢樹子」と。この様な公案に少しでも疑いがあれば、打ち戻って以前の如くに、「音声を聞いているものは何物か」と参究せねばならぬ。

今生こんじやうに明らかにしなければ、いつになるか知れたものではない。ひとたび（死んで）人である身を失えば、三悪道の苦しみから決して永遠に免れることはない。

誰が隠した悟りであろうか。ただ自ら無道心なるが故であると思ひ知って、猛烈に精彩をつけねばならぬ。

(塩山仮名法語了)

